

悲劇に関する覚書

Tragic Perception に就いて

佐 多 真 徳

Lucas の *Tragedy* (1928) は Aristotle の *The Poetic* (360—322 B.C.)¹ を再検討し、現代に於けるその意義を解明しようとするものであるが、その第四章 plot を論じているところでは、Aristotle の悲劇の plot に関する所論を次の様に要略している。

Aristotle の悲劇の plot の理論の本質は次の様である。最も優れた悲劇は人間はその盲目性のために努力するにもかかわらず却つて自分の努力を行詰らせてしもうと云う、人間の盲目性の物語である。即ち過失の悲劇(*Tragedy of Error*)である。*hamartia* (過失) は悲劇的過失であり、*peripeteia* (急転) は意図した結果と反対の結果への、その過失の宿命的、破滅的な作用であり、*anagnorisis* (発見) はかゝる真実の認識である。

Aristotle の plot に関する考察を明快な plot 論にまとめ上げた感がある。Lucas は悲劇の plot を論ずるのに、各語の概念に於て Aristotle の *The Poetic* に於ける考え方を忠実に祖述しようと努めながら、その各概念の間の働きに更に明確な関連づけを試みて、最高の悲劇形式を打出そうとしている。これは Aristotle の *The Poetic* を批判検討することによつて悲劇の普遍的本質性を把握しようとする彼の態度に於て当然の事である。Aristotle の *The Poetic* に於てはあくまで科学的記述の態度であるが、Lucas に於ては価値を論じているのであり、価値を求めているのだと云えよう。

自然科学に於ては現象の忠実な観察と記述が最初であり最後のものであるけれども、芸術を対象とする場合には、現象そのものとして作品を追究するだけで

は満足出来ないであろう。いや、むしろ優劣を見別ける価値判断の問題が、意識的にせよ無意識的にせよ、いつも問題とされているのだと思う。芸術に於ける本質性の把握は又たこの面に於ける優れた洞察によつて可能であるように思われる。たゞ価値は Bertrand Russell (*Religion and Science* 1935) と共に主観的なものであり、個人の嗜好、慾望に根拠を置くものと考えらば、価値と云う問題は具体的に極めて微妙、困難な問題となる。尤も嗜好、慾望に於ても共通的基盤を持つている故に価値の問題が存するわけだが、価値の問題を論ずる場合、性急に一般性や普遍性を要求する時には混乱が起る事に注意しなければならないであろう。

Lucas は *Tragedy* の plot 論に於て Aristotle の plot の所論に於ける *hamartia* (過失) を強調して、人間の盲目性を悲劇の背景的世界とする悲劇論を示したと云えよう。こゝで特に問題としたいのは Lucas が真実の認識と云つた *anagnorisis* に就いてである。

anagnorisis はギリシア劇に於て極めて重視された技巧であり、*The Poetic* に於ては、悲劇の筋に於て人の心を強く魅するのは *peripeteia* と *anagnorisis* であると云つて、かなり詳細に記されている。11章には定義を、「*anagnorisis* (発見) は、その名の意味している様に、知らなかつたことから知ることへの変化である。」云々としており、16章に於ては *anagnorisis* の種類に就いて、印による発見、記憶を通しての発見、推論による発見らを例示しながら記述している。今具体例を挙げてその何たるかを示したい。

Agamemnon 王は Troy から凱旋するやいなや、彼の留守中不義の仲となつた妃 Clytemnestra と従兄弟の Aegisthus のために、殺され王位を奪われてしまう。娘 Electra は父の仇を討つ為に弟 Orestes の帰国を待ちわびている。幼児の時に他国にやられた Orestes が神託を受けて父の仇を討つ為に密に帰国する。この時、お互に成長した姉 Electra と弟 Orestes がどの様にして相識ようになるか、その技巧が *anagnorisis* と呼ばれるものである。

Aeschylus, Sophocles, Euripides のギリシアの三大悲劇詩人が共にこの選

近を取扱つた悲劇を書いているが、夫々の工夫をこらしている。*Aeschylus* の *The Choephori* の場合に就いて簡単に述べてみると、故国に密に帰つた *Orestes* は父の墓に詣でて、二房の髪の毛を切つて捧げる。すると、黒服を着けた女たちが現われるので、身を隠して様子をうかがつている。彼女達は墓へ供養のために来たのであり、その中に *Electra* もまじつている。*Electra* は自分と同じ色の髪の毛があり、且、同じ形の足跡を発見して、若しや *Orestes* が帰国しているのではないかと心の動揺を押え難い。この様子を見ていた *Orestes* はもの陰から飛び出して、お互に名乗り合うのである。そして二人は父の仇を協力して討とうと励まし合うのである。

The Poetic から *anagnorisis* に関して plot 論をまとめてみると、

筋には単一と複雑との二種類がある(10章)。最もすぐれた筋は単一でなく複雑でなければならない(13章)。複雑なものとは *anagnorisis* 或は *peripeteia* 或は二つのものを伴つて、主人公の運命が移り変つてゆく場合を云う。*peripeteia* 及び *anagnorisis* は筋の結構そのものから生れ、前の出来事の必然的もしくは蓋然的の結果でなければならない(10章)。*anagnorisis* は *Oedipus the King* に於ける如くに *peripeteia* を伴う場合最も美しい(11章)。

これらはあくまでも *Aristotle* の悲劇に於ける経験的事実を記述したものであろうが、*Lucus* の plot 論へ道を開いている。

Lucas は *anagnorisis* の言及に於て、*peripeteia* と云うものは、 x の結果を生ずるように意図された行為が x とは逆の結果を生ずる時に起るもので、人間を敗北に導びく盲目性に存する働きであり、*anagnorisis* はこの真実を認識することであり、開眼であり、闇中に突如として閃めく電光の輝きである。*Aristotle* も指摘しているごとく、この真実を顕わす閃光は遅すぎない中に或は遅すぎるようになってあらわれるのであり、事前にあらわれた時には *happy ending* を導き、後になつてあらわれた時は *catastrophe* を顕わし、それを完

了せしめるに力添をする。ときわめて簡潔に取扱っているが、*peripeteia* との結びつきを緊密にし、上に述べた様に *Tragedy of Error* を構成しているものである事を強調するのである。

Lucas は人間の盲目性を悲劇の背後の世界として横たわるものであることを説いたが、悲劇許りでなく喜劇に於ても、この盲目性に根ざす人間の生活や諸経験の不調和、不合理性の追究をめざしていると云えよう。たゞ、喜劇がむしろ人間を社会的存在として、社会的諸現象を問題にしようとするに対して、悲劇は、個別者として、孤独な存在として、日常性を剥奪せしめられた人間の姿を、人間の運命の問題を真剣な関心を持つて取り上げようとするものである。人間の実存を問題にし追究している実存主義の人々がかかる悲劇に関心を示し、極めて優れた洞察を示していることは当然であろう。

Jaspers は *Von der Wahrheit* (1947) の中で悲劇を論じているが、その英訳が Gollancz から *Tragedy is Not Enough* の名で出ている (1953)²。そこで Jaspers は *Tragic Knowledge* (悲劇的認識) を基調に置いて悲劇を論じている。

Tragic knowledge は唯見ると云うことだけに興味があつて、加担し心を煩すことのない観客には問題とならない。*Tragic knowledge* と云うのはむしろ知の獲得、そこで私の自我 (めざめた内面の活動力) が、物事の理解の仕方、見方、感じ方を通して成長するところの知の獲得である。*Tragic knowledge* において、それによつて人は全体的に生れ変るのである。(72頁)

Tragic knowledge は悲劇の主人公の人格内に於て成就する。主人公は悲惨、没落、破滅を経験するだけでなく、これらの本質を知るのである。知る許りでなく、その過程に於て主人公の魂は分裂する。そして運命の極まるところに於て生れ変るのである。(75頁)

Aristotle でさえ *catharsis* と云うものがどんなものであるか吾々に明にし

てないのであるが、確かに、人間の内奥の存在にふれると云う経験である。それは人に単に見物人として許りでなく、自らまきこまれた者として、更に実体を受け入れさせるのであり、日常経験に於ける、煩瑣な区々たる劣等なものすべてを、吾々をせばめ、盲目にするすべてのものから吾々を純化し、吾々の一部を真たらしめるものである。(36頁)

Lucasが「真実の認識 *realisation of the truth*」と云つた、悲劇に於けるこの認識作用に更に鋭い洞察を示し、深い意味を附与しようとしている。ギリシア悲劇に於ては技巧として重んぜられ、Aristotle に於ては *denouement* を導く、人や事物の発見であつた。Lucas は人間の盲目性による悲劇的過失の認識であるとして、悲劇の筋に於て更に内面的意味を持つた働きであるとした。Jaspers に於ては Aristotle が悲劇の目的として説いた *katharsis* 的のものへ導く、つまり悲劇を真に悲劇たらしめる、悲劇に於ける本質的な認識作用と考えられて来ている。

不如意な悲惨な事件を通して、人間の現実存在の本質的意味(Jaspers の言葉をかりれば、表面的には成功し、安全であると思つている最後の、一番奥の砦に於てさえも、人間は無底性に対して見捨てられ、見放されている。吾々は「成功か失敗か」と云う二者択一に於て悲劇を考える時には理解することは出来ない。吾々が最高度に成功している時にまさしく、吾々は全く本当に失敗しているのだと云う認識によつてのみ悲劇を把握することが出来る。96頁。)を認識し、その不条理な運命を '*Ich kann nicht anders*' と云う覚悟を持つて引受けてゆこうとする悲劇的態度こそ、悲劇本来の面目であろう。そして運命のきわまるところに於て、人は生れ変わるのである。つまり現実存在に於ける本来の自己認識こそ、悲劇的認識であろう。

悲劇に於けるこの面の認識と強調は、人間存在の危機とその悲劇意識が叫ばれている、現代の歴史的況位より、又促進されていことは当然であろうと思うが、今この点に就いて論及する必要はないと思う。たゞ、文学者による悲劇論に於てもこの様な悲劇に於ける認識作用が特に注目されて来ていると云うこと

を付け加えねばならない。Herbert J. Muller はその著 *The Spirit of Tragedy* (1956) に於て次の様に述べている。

Kenneth Burke が持ち出した言い方をすれば、悲劇的行為の基本的リズムは目的 (Purpose) と受難 (Passion) と認知 (Perception) である。主人公の目的は敗北し、その受難は悲惨に終るが、最後の認知によつて、主人公は運命と和解する。彼がそうしなければ、観客がそうするのだ。(19頁)

悲劇のリズムによつて、主人公は運命の「認知」が可能であることが分るばかりでなく、この認知によつてよりよき人間となるのである。遂に己の運命に優越するのである。(21頁)

Burke が云い出したと云う、3 P の表現は極めて優れた卓見であると思う。³ Tragic Perception は耳馴れない言葉であり、恐らく一般的用語になつていないと思う。私はこの書から、悲劇に於けるかゝる認識作用を Tragic Perception と呼んで、論題としたわけである。

私は最後に Lucas が 'human blindness' と呼び、Jaspers が 'Man is forsaken and abandoned to the bottomless' と述べている悲劇に於ける人間の現実存在の在り方、及び認識作用に就いて、更に私見を述べて批判を仰ぎたいと思う。

悲劇を運命悲劇とか性格悲劇とかに分類する場合がある。つまり、主人公の破滅が人力を超えた運命によるか、或は主人公の性格的な不調和による、とするのである。運命であれ、性格であれ、これらは主人公が如何とも為し難い、自己支配の出来ない主人公の人格に内在的なものであると考えても無理はないと思う。今、仮りにこれを「私を他在的に動かす無意識な自己内在的力」と呼び、「認識の主体を為す意識的自己」に対立せしめて考えたい。そうすると悲劇の主人公の行為の在り方、存在の仕方と云うものは、意識的自己がこの無意

識的自己内在的な力によつて翻弄されると云うアイロニカルな姿である。そして悲劇的認識とは、ある悲劇的な出来事を通して、意識的自己が無意識的自己内在的な力にふれ、一度は錯乱するが、その極に於て、生れかわつて、私の存在の仕方の認識に至り、これを自ら潔よく引受けようとする態度に至る働きである。この様な悲劇の主人公の存在の仕方に就いての二元論的考え方は *entre-deux principe* に於ても主張されるところであり、参考にされたい。

Sophocles の *Oedipus the King* は正に Tragic Perception を主題にして書かれたような作品である。Oedipus がスフィンクスの謎を解いて国王になった Thebes に疾病が流行している。神託を仰ぐと、先王を殺した罪人がまだこの国にいたので、死刑にするか、追放しなければならないと云うのである。その罪人を追求している中に、それは誰だろう、Oedipus 王自身であり、曾ての Apollo の、父親を殺し母親と結婚し子供をもうける、と云つた恐ろしい神託を逃れようと努力しながら、おのずからその神託が実現しているのを知ると(*anagnorisis*)、自ら眼球をくりぬく(*peripeteia*)、と云うのが荒筋である。Apollo の神託は超自然的に宿命的に Oedipus の中にあり、Oedipus を動かしていた力の、古代的表現であり、まさしく「私を他在的に動かしている無意識な自己内在的な力」である。スフィンクスの謎を解いた明敏な知性を誇る Oedipus に於ても尚、blindness な人生にたゞよつていたのであり、自己存在の仕方には全く盲目であつたのだ。Oedipus が眼球をくりぬくと云う行為は Tragic Perception の消息を示して、極めて妙味を持つている。Sophocles の *Oedipus the King* は本来の自己認識に至る Oedipus の姿を卓絶した技法によつて極めて感動的に描き出している。

Shakespeare の悲劇の中での *Othello* はその筋の結構に於て最も優れたものの一つであると思う。武人の典型と自負している Othello(意識的自己)が Iago にたきつけられた奔馬のような嫉妬(無意識的自己内在的な力)のために懊悩の淵にたゞきこまれる。その狂乱のあげくは、愛してやまぬ妻 Desdemona をその床で圧殺してしまうのである。それが Iago の奸計によつてたばか

られたことを知ると、怒号し苦悩するが、最後に **Lodovico** に向い、「只だ御書面で手前の不仕合せの一条を本国へお申し送りの際、願はくは、聊かもお底ひ下さることなく、又聊かも誣告せられるやうなこともなく、どうか、有のまゝにお伝へ下されたい。……（逍遙訳）」と云い、短剣を胸に突刺す時の **Othello** は一切を明らめ、自らを引受けてゆこうとする高潔な人格を成就している。これは外見の敗北にかゝわらず、本当の意味の勝利である。いや、勝敗を超えた新しい価値が掲げられたのであり、生れ変りなのである。

King Lear や *Macbeth* に於ても、**Lear** の専王的浅慮、**Macbeth** の暗示された野心らが主人公を破滅に追い込み、そのきわまるところに於て **Tragic Perception** が行われる姿をみる事が出来るであろう。

現代劇に於ける優れた例として **Eugene O'Neill** の *Mourning Becomes Electra* をあげておこう。この作品は、先に *anagnorisis* の例としてあげたギリシアの伝説や悲劇にみられる **Electra Orestes theme** を **Lincoln** 時代のアメリカに移し、もう一度人間を語り直そうとしたものである。即ち、**O'Neill** 自身も云っているように、現代心理学を用いる事によつて、ギリシア悲劇では外在的超自然的なものであつた **Fate** や **Furies** を人間の内面に内在的なものとして見出す事により、この神話的原型的悲劇を現代人に理解させようとしたものである。「私を他在的に動かす無意識な自己内在の力」を、ギリシアの運命のかわりに、精神分析学の無意識の世界の働きをもつてしている。しかし、この作品は単なる無意識の心理学に肉をつけたと云うものではなくて、実に巧妙にその理論を駆使し尽して、優れた芸術品となつている。殊に、最後の **Tragic Perception** に於ては、**Freud** の ‘**Mistake in Speech**’ の理論が実に巧みに且悲劇的アイロニーの効果を持つて駆使されて、この戯曲の結末を緊張に導いている。主人公 **Lavinia** (**Electra**にあたる) は父が殺され、母を死に追つめ、弟が自殺し果て、今迄自分を縛っていたマノン家の人々が皆死んでしまったので、恋人 **Peter** と結婚して新しい生活を始めようとする。ところが恋人の胸にいだかれている時に “**Adam**” と呼んでしまう。聖書以外では聞い

た事のない名前だと不思議がつてみせるが、実は、祖父の弟の子であり、母の恋人であつた Adam Brant である事に気づいておどろくである。Adam が母との間をカムフラージュする為に、Lavinia を散歩などに誘つた事があつたのだが、Adam が母の思い者だと分ると、Adam に対する気持は無意識の世界におしこめられて、自分では忘却してしまっているのである。無意識の世界に抑圧されたものは生き続け、更にひこばえをつくつて、いつか意識の世界に躍り出ようとしているのである。今、この事情を認識し得た、Lavinia は「何時も死人達が自分達の間にはいるのだ。これ以上何をしても無駄だ。」「愛は私には許されていないのだ。死人達は余りにも強すぎる。」と云つて、過去の重荷を負つて、堪えてゆく決心をするに至るのである。この Lavinia に就いて O'Neill 自身 “She is broken and not broken. By her way of yielding to the Mannon fate she overcomes it.” と云っている。⁴

この様に、無意識な自己内在的力と云うのは、時代により、作者により、又作品によつて色々のものであり得るが、最もすぐれた悲劇に於ては、「私を他在的に動かす無意識な自己内在的力」が「認識の主体である意識的自己」を翻弄しているアイロニカルな存在の仕方が、悲劇の主人公の姿であり、主人公はその無意識な力によつて駆り立てられ過失をおかし、悲惨な運命に落ちいるが其の事件を通して、その存在の仕方の認識、即ち自己認識 (Self-knowledge, Self-understanding.) にいたるのが Tragic Perception (Tragic Knowledge) である。然し、この様な図式をもつて直ちに悲劇の価値を判断することは勿論骨格な仕業であつて、悲劇に於ては、その主人公達は皆、個別者であり、例外者であり一回限りの自己の存在を生きたのであり、大切な事は、具体的な主人公の肝銘であることは云うまでもない。

註 (1) Aristotle の詩論は *The Poetics* と訳されるのが普通であるが、こゝでは、Barrett H. Clark 編 *European Theories of Drama* (1947) に収録されている Theodore Burkley の訳に拠つたので、それに倣つて *The Poetic* とした。尚日

本訳、松浦嘉一氏の「詩学」を参照した。

- (2) *Tragedy is Not Enough* と云う奇妙な書名に就いて一言して置く必要があるだろう。Jaspers は悲劇は決して超越世界や存在一般の基底の上にあるのではなく、あくまでも、感覚と時間の現象世界、歴史性を持つ人間の現実存在に於て起るものであり、悲劇的認識を悲劇的世界観、存在一般の様式とする汎悲劇論的傾向を警めているのであり、同書の緒言の中で Karl W. Deutsch は次の様に解説している。

Tragedy, though rich in truth, is not enough for Karl Jaspers. It is a basic aspect of reality, and we can neither deny nor escape it. But the experience of tragedy is only one stage in man's process of learning. Taken as an absolute, tragic knowledge turns into idolatry, whether it be idolatry of images or idolatry of self. Rather, Jaspers seems to say, men and women must remain open to the voice of the world-wide misery without grandeur that cries out for help, and they must seek to transcend the limits that bound their sensitivity and their ability to help today. All of us, he seems to suggest, must seek the hard way that continues beyond tragedy—the way of which perhaps the Bible speaks when it calls upon men to overcome their limits by being “born again,” while yet remaining “members of one another.”

- (3) Kenneth Burke の所論は未だ知る機会を得ないが、Francis Fergusson はその著書 *The Idea of A Theater*(1949) の中で Burke は *Philosophy of Literary Form* と *A Grammar of Motives* の中で本文にあげた様に悲劇的行為の基本的リズムである三要素は便宜的に Purpose, Passion (or Suffering), Perception と呼んでもよいが、*Poema*, *Pathema*, *Mathema* の伝統的意匠を与えていると述べている。ちなみに、Liddle と Scott の *Greek-English Lexicon* を引いてみると、

poiema : anything made or done, work.

pathema : that which befalls one, suffering.

mathema : that which is learnt, knowledge.

と出ている。

- (4) 詳しくは論者の「Eugene O'Neill の悲劇 “Mourning Becomes Electra” 試論」(弘前大学「人文社会」八号所載)を参考にされれば幸である。